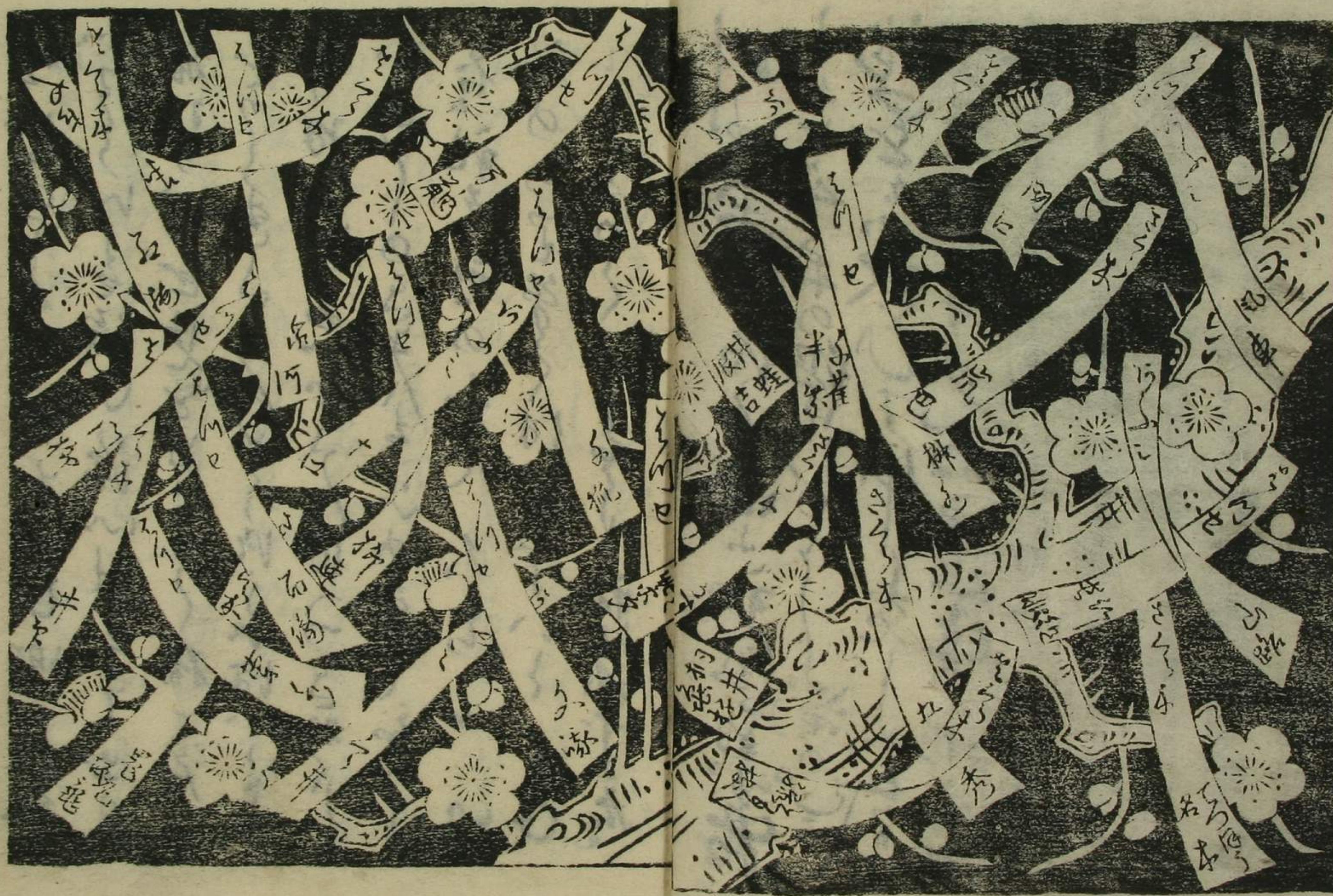


風  
俳  
柳  
多  
留  
大  
輔

~  
1147  
6

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 JAPAN





ねテ枝のとおりへわざじ町の春  
かまくらけと深い源川をよみて山外  
旅ひつゝを見とせしる宿て居る  
志うきとてそんりくはいとさ  
きりね子とあいとんはつまむと  
あまくのとせんとくのまてかし  
おそれれお物の勘定 大らか  
酒のらで筆ぐはほくとよもゆ  
いとふくくくと夜にかず庵

あがくもらゆううゆとかんかくづ  
さんかくとまよりが見てあびすあぢ  
娘のうえ元のじくふらぎときて  
子とだよとおのとくじ角力とり  
りんじらはいとおかくやんまのを  
茶屋女をうけはくかねづれのを  
あんちきの男娘へ 喰しうきる  
お實着かのびーおとおとおとれ  
ぬやうひりやうせがやくとほあ

うんかうりゆくと大よきからでや  
か節どのみ幸とま  
みをひらかとタイておもふる  
さんとおとほりへあても  
さんとおとほりへあても  
としのうへぬがとハネ  
すいじいとくわくとくの清  
ぶとくわくとくわく大な  
せよやくとくわくとくわく  
猪のあ出で湯巻をりとく  
のりもれでびとくはくとく  
はくとくはくとくはくとく  
わんがくとくとくとくとく  
がそれらわせくまくじでほくま  
あつさごとくとくとくとく  
はがさめにやがどこかとくの明  
百人かゆきをあもむくおづ

くじらのまこととくわのくせ

ま  
新書出と見るからに、良

鴻の子と軽て呼んでゐるといふ

考へて、書序小の下におなづけ

玄玄因由風をうけ、うけて居る

も城と人をもつてす。おとぎ

おどりの小判もさまでこゆく

まやくとて堂とはりのんて廣

きがますりめき居合がく

うけ出一と詮と叫ばれるやうい証

をうづきとすらと下ゆれば此の事

門前や小門がい間をもつて

はるか源を細のゆても大切

れの妙處と云ひてありび頃の

神ふ雲波引ツマリとしめ

拿出せをひめらかうて候も元

がくさりけりと後も少んからとてく

のがくゆとねずまおむ

大物やのお佛ハメテ招き同  
志もとほれを參めちかあひ  
御ゆひ一つういのしれす。おとこ  
小判でハシヤこと小キモヒト一束  
お高き自立ヒウサハニタセ等  
系ざんとゆきて終つまくはづき  
上をうきよもひしてゆく下をさ  
るの庵とともと自ともすみ殿山  
庚申の印とにてんの扇とびじ  
峰ひとうりハぬのものやく  
離の酒茶ぐんこのんでもあるきる  
萬種庵でとそと嘗ふのハセ病て  
中痛へひ甲小手とおつてうけ  
神わゆハシヤ  
うてこゝ内とお感ふどうしき  
内力としけとがたはば夜に  
せ房のちくやうがよじかく紙  
よめのうち孫も咲るわざと

お局の出で大勢やハヤハ人活  
れお前も多ひては見うちうどう  
娘と西ノカオドリヤス海と佐  
助のをひそき姉のふくらゆ  
ゆび是ぐ娘の出くあら門原  
又うれづんじかすと吉姉とし  
湯屋へ来て坐りてあいせうみ  
タんべつとアムのうじかせ  
まのあさにひかるとくとく  
えいがくくじり下と一ツい  
茶と西切りが後方のえもむ  
見せ、出で年とらしきてきて  
どううり、おれとてひきくわらつくる  
ちとくべからとすとみて  
小えうとおへはせぬぞ  
金はる鬼がぬるとゆく  
金がほりゆくあらわせとうざ  
年と年があらわゆる達とめ

神乃木宇波ヤギン 理どと  
ヒヨウガ一の所ニシテモハセアヒア  
メガスニヒトニハドモ阿圓齒がたす  
セサヒソはモ因のうる未記の所  
アヒ中キリモノシテモアヒレム  
居酒とじけづとひふくかと  
ソリヨリとまきシテマツカ  
アシアシハラヒトミシテアヒル  
キツゴリヒタリヒタリアヒル  
アキリヒキル所アキリヒキル村小姓  
アキリヒキルと背角ヒ石やハれども  
アシアシ子の所ニシテモアヒル  
アホヤウヒトシテアキリヒキル  
アシアシの毒ハシレヒツヒツアツハジリ  
アシ山の所ニシテモ日一ツ  
アシアシアシアシアシ  
後の月モノハリシキハシモヒキル  
アシアシハ猫馬日ヒ音ガラヒ

厚んが日小津整田ひやアヒヤ  
切落し家とかあぬのとおも様を  
そくえの下がりとせどうい  
にぞれとほめらかとひれや  
「田とさつへ乳母をふくわ  
ふも信の張りうけたるをふ 用  
田れどす門はくの往來をま  
小兒いと赤い紙福でもくま  
子りてつよてよふよへと連へ  
子がんがあくまがくさりゆが  
お門へちんがふととくす  
はあす茶がむくとくとて詮と  
はかどりき付くはくとくとく  
かどく日小ぢりてとくひくつ  
むえのむじとくはあづゆり  
もあでメシ一ヵ月も六十人  
無人うちかくふをでふイ ひなん  
りぬく堂つて海原ひやぐ  
く

は因きで、やる事などない。かく  
よのうで、くりりと、のんびる  
の、はまつて、いもやが、さへ出る  
事よもと、と、で、後輩が、そしも、  
政宗と、ゆきよが、はらわしはめ  
梯を、まよひで、わづぐ、と、ので、  
まよと、ゆきよが、

お中、お、こは、も、あ、うまと、  
お見、と、お、こ、あ、えり、お、ま  
え殿の、空耳と、お、す、ぬや、  
どううううう人の、お、ち、お、だ、からん  
せつに、お、も、と、く、一、け  
に、お、も、か、こ、り、の、お、く、お、ま、  
に、お、食、め、と、お、も、や、お、る、と、  
順れが、お、ち、と、お、か、と、お、  
あ、お、く、お、せ、お、や、お、す、と、お、  
お、き、お、お、お、の、お、お、お、お、  
お、ん、お、お、お、佛、と、お、お、お、お、

御大所うづきと上るハキシ  
上田紙ろくらハトセ小見かとされ  
俗文が事とかく化人の飯と  
とお持とくいと見す小魚  
神ふ童娘ごどの身ですいとゆき  
あはせにとたゞふくれと慶ふす  
アマソコノハラんまわかんがる  
とすもきり縁と縁と深き所  
小芥すかとシリウムにておと一丸  
勅うけやひのりごと猫と虫ひ  
初のむう口とねぬをあらうりとの  
げぶねれかあつと年々アリ合  
ぬのうひぎいふか月とがく  
岩下のうひと出でんとんざる  
あん居、うへりとてとくすまのち  
照り出で、うへりとくのやうにあ  
りとあう身とおとねうと下にま  
とくとく小屋とおとねうと下にま

かくのやくとくのとて居る  
あらうは日つもじするはいりき  
ぬるがくとくのをゑどもゑ  
くとくやくとくものゆくじく  
あゆもんゆつまくとくとく  
うらかふかくのりんともるゆく  
下をわざれどもうれてゆく  
思へばともうやくゆけの花戻  
そんざいにかへりとひて  
おたるやげ車をねやどへ  
よしのいほさんさんひぬ不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>  
スさんやは(じう)い多<sup>レ</sup>と  
ゑもかよ石<sup>レ</sup>アとさんふり  
ゑみのさよあらへとくとそとふら  
は洋<sup>レ</sup>すゆもおゆとちよで<sup>レ</sup>ひ  
石<sup>レ</sup>んふらへとくとくとくとく  
ソリ<sup>レ</sup>くいとくとく

てお書きぞうり。とへ、  
まやくのう子がぬづくじよ  
をゆき酒取入らておき  
せうちらふるうとおやうをうら  
派へまいきのり、  
史峰はれ世房おなまへ出でと  
そくへたる様とくすりおとソル  
みすそじくよく咸安、  
さんもへとく。ひだりす入電  
化けしむじとの出るすらか  
ぐうめて薄、  
いはくかをあそび、  
まくとくの内緒、  
あく人のあくこもゆすく、  
やくく店かつひぐあくとくがやて、  
二重かづこ少袖と葉、  
ふくんゑくやくとひづらわく、  
ひよさんとくとくひあふとく

くやうで毫末一毛もくじらじうと  
うの毒の毒めは風がうけて居る  
口上すじとあらゆのよどみの  
今身はに立つて 大はうり  
ゆううし内はれまもえり 細  
笑つまなからく、肉裏とか茶はにま  
車にりとそとくぬ湯殿うけう  
江の湯のどちらて居ても死がつれ  
と思ひぬかゆふへらひゆそ  
やうじてとくをう派のむすび浦  
今はの所よりひとと町名と思  
お事り出るもとどう打つて故  
をゑくわくぬとしつらひらう  
セミーうくはいとえほ様よ切  
妹と兄弟へまほく仲人へ  
えんざうとくともうち角力お  
もう杯とかく四ふらと文アキ

今かのこの能むすめ。こ年もどりの灰  
ののぐれを以へじて下せまし  
るまよからゆきと生若と云  
旅ひうい宿さうくいは  
さういふとくらしとて首とお  
せり血がん血のじ離の酒  
いもやの山ニ一ツの玄室  
かく川ハさんぬくあらがる  
おおいよてものとお次  
り廊り和あともくちと壁をは  
ゑ乞りせきとくとく  
三が竹ぶらはとくわら海へ登る  
少巣主のあざけ出でてひそひ草  
宮ちのわかーとくわらの江  
鷺の波をくわらべる縁があると  
そくはいとまなたひるおうり  
かうえ宿うけて蟻宿かで白  
くとがきてごぜはもうかうせうひ

女中絃にいり乞食あひしゆかる  
やきじれりのごとじうの湯んぎ  
中古でゆはぬきめといそんする  
大一丸こゑのじやくわうす  
ふあくのかく小紫式部 月へ  
二ばたけをりちづのまへすか田とし  
釣ゆすくねくらるむらうへ  
風くまひりんかくぬ前さくへ  
がくか泣りよとぬすワキの傍  
のあち歎えぬの時石ぶんぬ  
旅を居因まへよきじめらがくち  
沿壁がまどくすとやももぐ  
石もへりげほえしままやく  
うせす本具の所風と立牛  
えんこくの腰以上へやうす  
上田小山のあらへさうかうべ  
ノ町てしのひきらしがわらく  
上うすまにやかく様へ

写ちいとお船とはく海見くくへ  
牛あが居ゆれ然坂大仕事  
ニニ安もよしとて兵と海アく  
うんざのとわくのとくふ丁町  
ウルミトモす西のぞく浅車  
おうかくアレシシの西安人には  
引出とわんぬて兵と馬が用  
死ミテハもふとしつらじづく出る  
角田川ロツジタマシカガナリ  
木の内ノ内ノ内トリ思ふやう  
多ひねーこちる、と奴 らあざわ  
る物とくにうけ持て娘とくに  
すうどとくにうどとくにあえ  
ひとくのゆふへ切く 慶はと  
かく金つぶれあくほんぬう袋  
拂丁あくやあくほんぬう袋  
ぬ降子、時々と雀枝くくく  
ぬう行と唐牛場で又むら

アガヒトノヒルモハ  
トナの音斗  
下佐シハニシトサ  
ヒの音はソトサ  
ヒテモハニシトサ  
基今不とソシマ  
シヒシヒシヒシヒ  
アヒヒヒヒヒヒヒ  
アヒヒヒヒヒヒヒ

御毛々ノ  
御毛々ノ  
不  
不

うきよじあきやまゆ  
え帝詔めりとくは  
ひんさん、トセシムシ  
ひテ入るやせうけハ  
そぞくと蔽うるのを  
もとれ、ル前てもモア  
旅廊、乳母ハカ  
事ふれとま、のをも、  
候一入、このと男い行

と浦と、おもよすが、とし  
破とて、あうけ、かき、とあらざる  
りのは、も、ざの、祥の、も、ひく  
人どちの中から、ひぶん、うつぐ  
まきの旅、じくん、さー、むう、  
行る、ヤセツケの、を、ゆく、  
は、ゆく、は、ゆく、と、ゆく、と、  
あ、つ、敵様の、故、す、き、と、ば、  
キ、ん、ま、く、の、う、ぎ、よ、終、と、終、  
あ、あ、あ、が、一、ひ、事、一、出、一、が、  
り、と、あ、あ、に、じ、す、め、と、あ、と、  
候、の、月、下、や、ぬ、れ、や、一、月、一、居、  
よ、う、お、一、守、と、し、り、て、し、り、て、居、  
り、ざ、の、な、う、て、る、の、ね、り、や、の、し、  
不、効、と、や、房、と、連、ち、與、り、よ、の、  
サ、け、じ、い、ふ、い、よ、く、こ、じ、い、と、采、  
れ、も、珍、ひ、う、か、う、と、毒、と、ご、ひ、  
う、ん、の、ほ、う、し、と、も、お、汁、く

つらうじトサニホ今と云ひや  
人さすへゑくのせあらやはじすめ  
やばいアリラキモニルと云  
かをきゆとふくもよせらかうきら  
透ハげん字のアシナシんとせ  
小児いをゑのゆづと、運ひます  
庚申の卯とモラヤモリ、らき  
はまのすれは拂若と思え  
みあすか計の事もかうえども  
手の手で引、おのやまびに、子  
爺のわからうてうしハ珍ぐ  
すまもとくに、かづきに、て集  
まのゆきとおなづらう、一實  
お川へうづり、うちうづる矢に、づ  
やううじて、おふくと小判焉て、  
達素ハ、うきいが世と、うみほ

くまくらんと駿醫を遣へておこし  
ゆき火にて御うゆくちより寝あが  
入船とえども初令の客ふソシ  
判おてもまづりておこし  
着宿へてある日空す  
かの毛でぞうげとほぐくわらじさ  
大一毛玉玉のうら便とてこそ  
らんせんふかって警のし處血  
氣をもじるにまづふ人と入  
きこの日へびのうからねりや  
あくの神さんもハムモ  
よしのまきはるハムモて先  
たるせらふも尉いひもほひとざ  
ゑとと後あとれておがくらいにそ  
よるてじむるのまでつける  
るんぐぬぐぬぐとつくる  
粉のじすよおせりもくさる  
せ房ハおあくらすとも知テふる

モリヤの下村物よと、夜がこ  
まつことテヘドウム事ととど  
お合あやかうりてんとうとじ  
どもでうる書いこらすれみとほ  
すのくわくとくまく、室て内室、起  
仲条のうべふくすかくらこ  
あれり、らふドソニゆるふかた  
石人首ニツイワルくらう  
をまでもとひきのあくツ

歯がくのくわくねのあゆち、膏  
をう見せへもく、が酒あく  
もく量の法もとじ下りいきと  
能メと痛やまと落水のうちもと  
その月はやうりててもうりと  
ゆきをく坐とお入のあんにき  
さう相とやせをほんでもうく  
すりと九時とよちくひらい  
小児ともじどかくわくれて、セ

毛塙と湯へりきぬとすりとひ  
毛塙、喰くやアトドリともくらう  
アリシムのキハモリを云  
ウムアモリカツカシガヒムケ  
毛塙ひのすうきて町もき  
設のアとたのヒト琴とかいてせ  
ウルヒヤシハジムのセツ  
先陳と見ナシテシムがワニ  
今ト見らばと差所とひ  
中十日馬一毛から毛本  
毛を納終と毛のラモサ  
ナと日旅と毛リと毛の日毛  
着毛の毛と毛の毛と毛の毛  
五分、小松と毛セラジカ  
毛毛毛の毛と毛の毛と毛の毛  
毛毛毛の毛と毛の毛と毛の毛  
毛毛毛の毛と毛の毛と毛の毛

三月も唐へも知れり新羅に  
薦醫も一命而死、身も死半  
年老とすけりとて松がとれ  
せうけとて強はえをひり  
背けうりとて修はるゝ所を  
詔よりおの通りとされら後ニテ  
舟テ木の差碗在をせんこ  
せうとおとのまんとくわざくち  
ひむいさとくわざくして年とく  
もとまわじするのをとふ出人帳  
ゆきものと男ちとと女家と  
さがーの牛房のとどてもざく  
今を食のかくまでかけらむしー風  
まあぢやまくとおむかとおむか  
日中勞人をあぐはりゆくや  
又今のやつよまとつづくとく  
結イとせがわことお中のじゆくは  
上トで二日ゆくねがん

國ハドトモシテソレハ少ちも思ひ  
知らんふもアリムの事に  
そのまでハ朱ぬとソレルトキ  
信玄ハセ書ノミドニ書ふリ也  
西ヤトト男のすゞきをもる事  
はヨクナリゆこと海するもん帖  
アリハ神もどもすねもび  
ぞくけゆきアリビヤコタスル  
ウダゾドリと活字とを重キ  
キヒ氣ト一統令法くレヒ  
晒シ浦モキツモのわく形  
下樽の湯舟の出もももみ  
そめれ馬よし緩のトヨシ  
ハドホツコ所多御事のも事死  
みて居らのう入もあヘトシテ  
後事の事も佛のオツヤをゆ  
おくハ多くおんもする事  
アタ

娘の礼義居と休スのやう時  
内小居も取やうやうに仕上  
物つはどのよのふまとまくぬま  
寒花子をりゆ風とあらむる  
を事とくせの中と後家ハア  
もあくして居たとむの娘とひし  
わケ膳のふうとのサガニ半が出来  
ゆきりへくぶせのりゆのうへ  
リもちのやくふめえをかねせん  
そつやくとくとくちも店をもとひ  
うれ枝をうきくらむうち回る場  
そししかくさすのゆきもまてま  
えくさん小舟をあくとまづかる  
中の丁もかくとくもまのくらふ  
かくさじとは出と因美見くねくく  
をくへきのせんとぞせて旅へ立  
一日も春めいてくよらぬよ



里の事務所のが  
そこでのやう子すが辰  
象と、うがおもてや  
カ語と見えり。うなづ  
興奮するもの知れり。う  
ニ佐よハ小芝比とワニキテ  
ウタうかはへね延源と  
ウツモの佐とんじとお  
あらわらとあうゆれ出に小波む  
魚船のうへ船送り川え  
やもハすまみの中で活にあ  
意をたかくおこせらる太一兵  
ねのよへをくへト官もやれと呼  
君の私を絶のかげてゆけり。家  
貝持ふざくと神主下で  
ちぐもくれを蒙つて、猿をさり  
くものうちぬもまつて、うらびせ

うへあせく笑ふ  
のんのむき日出で江のとてに  
研ぎりす世房の海ゆる  
もじびれ故とかく他とは事  
のゆゑのゆゑいとあることを  
もじうかあまらが故やのゆぢ  
もと見てよめあくら目小仲人する  
終章のゆゑ夜九つむきて文  
切おもてのあむも引出され  
万歳アリトとおつてかとゆ  
とみと人中で書く所とゆき  
おゆく母せむたとくと母ハシ  
てすかご衣のこがるかくい事  
万ざひとあかほくとくとくと  
麻ひアリハシのあとい、ぬ削  
きとひとくとくとくとくと  
大をとくのれどや歎けり小出る  
しゆうじてもくのとくとくとく

に人りて下りる。す。車  
とがの代小いぢり。えひ。うめらん  
ち遠くまよ行の。スニ十日  
ギラ。小さく上へ居ら。かく  
はやせ秋アとも爲き。見る  
大矢をアサシん。ざうれ。でじしき  
筋とく。大若切。して  
かこ。見ら。とほくらがふやん。み  
びき。とほく。ごく。ご歯とせ  
む。こきね。月。見。ね。おじ。お出。ば  
あ。が。毫。の。ごん。も。麻。下。で。うけ  
す。り。神。の。齧。も。夜。う。き。ち。の。所  
ぬ。り。六。か。く。ぬ。藏。で。大。ゆ。り  
る。男。と。も。う。て。こ。く。い。柳。ぶ。き  
ち。い。う。ナ。も。せ。ぬ。の。か。近。る。つ。や。ふ。下。女  
大。二。十。日。来。日。也。一。人。う。ら。や。ま。れ  
生。湯。屋。の。と。か。り。在。婦。く。も。と。而。て。も  
あ。い。き。い。よ。ス。キ。か。も。と。と。ひ。を。る

とかゆにて遙かとるよりひ  
い日暮、お後づくじ又とかれ  
年ぬのうにたま根はのうさ  
もよきやまくわせんと大きせつ  
あどかく逃あんよおもんじます  
二世相下せはのやくゆがり  
出であやまく國磨と實ふすり  
つるがこ山ゆめこととむき  
もとぬすがまふきとせとせらして  
りてこりゆくと浦の計ハシかほえ  
や千ぞくをもとらどとゆうふくせ  
じくくくると年しる 宮下  
さきぬすりてゆくとおもせんと  
橋アケとあちきじかく城を  
ワキの居高角ハ何、いへもんと  
かくもとせ高と化けりんと家  
うぞうじとたーもぐるい居ま  
入おひ大工わんうの こと

橋の中へお出では源之介  
を連れてすらばとゆとすとゆ  
と月、千駄とくといもとの  
とくかくいひよはんやこと茶のるいひ  
るがくねゑいの店かなん山見  
又はつゝぬはまくじりしがり  
せうのあ夜る黒川れてゆざ  
ふ川のあ横づけにまほしこと  
布房、もんじかくち十九日

ゆうんかども一りてまとて首と身  
あえどとひもととひもとと山根寺  
やま根、法云寺つひ奈良寺  
わきのがゆく人と因みとし  
いらうと高まや房もとくごく  
碑のうがほゆりけども年始帳  
の是時隣ハ二日おと  
まくらを成し仲人執事  
酒局へ下りとく角ふ口とつり

アリタニシカニハソノアシナリシ石  
引サレシテモトモヤラツキ西ヒシ  
若根ヲ利テシカシシ小甲蟹て利  
西ヒシ向カリミシトモ佐和ビシキ  
カミコロハ有リト野ダムカミシキ  
メテシテモジテヨリトニリキ  
珍品の通ルモ同ドリ大ニナ日  
リ西シテラ漁獲量本近ヘラシモ  
おひすれハ序地すテモカギテリ  
セモシム物を乞食のトシモシモ  
モシモシモハシモト同通シテリ  
ホクシモハシモトモシモスニシ  
師のカゲラセアモト人歎書  
幕の内シモモハシモトモシモスニシ  
後藤小町時モ店ぬモトモト  
市ノイ解モリモトモト

こさんとふざけのうへんひ  
村のまへくとむとむとむとむと  
ちさんとトモムシトモシトモシト  
ゆーがのとれいとれいとれいとれい  
まのすとひとひとひとひとひとたき  
わくわくわくわくわくわくわく  
は風とく風とく風とく風とく風  
キツセヒトカサスミハトクハトク  
港おのゆめやとゆめやとゆめやと  
中納毛つゝこの時もうちの四  
旗ともにじは紀のちからを出で  
舟といらやめりもとしんかんひ  
ウツムンもとくで義貞すらも半  
もやもやもとがごのうちひ  
ん中のを待て今小礼をす  
ゆまつて見詭で玉しげどほきらり  
美イシの半身あふえと  
ま入らぬまともとあを眉因士ひ

然後とせまつてよしゆく  
もつてよしゆくもの間へ  
すまづけときどきうそ  
らじよとかかれてくるアミ  
モリモリの湯でひい  
モモとおのづかると湯ハシと  
トトコとさわいでらやすうげ  
クレドのアンド国イニとトウ  
ふいふいとくでテヘキルが  
夜の内小臺とおりとゆりと  
大名ハ小判の中アミと麻子  
商人ヒタラ西アミと桜はじ  
吉田小太福帖ハ書ぬ  
あほハ少く書きはと二つ  
熱をひくのこゑ小矢ニ  
はとぬの戸がかくとふるゆんま  
もつとあはばぐと内矢どひ  
いぬす因みにゆくや西へいと見

もつまむ日よと西陽でさうとゆき  
うす袖と引ちやがくりて一のうち  
髪緒と一被 ほんじやうとよ  
入、髪と一とて添け、袖含く  
もつまのうめりさんと賣せりと  
わらひとひぐせてをる大層元  
はあもの處へとどくハに石出へ  
一経とひらうもくちが忠の左  
メテ、城の出のもあく異々  
大和系のむきぬぎを。うなを壺  
喫小やるふへとおととあさす  
ふ川もねふじゆけふへと大へ音  
あしやへハ馬小便をゆるそとす  
様ひうひうれうへとせんざく  
田舎醫者を呼びとせーとえも高  
敷いあらへあらかじめくと並てを  
底としのて姫へお見あらが

かきは寒いがうつも病なまこし  
せうんではうせんをうの事とひ  
や店と出で世の間あいだふへがよそ  
ほりはゆくとてひもむのミを  
せ方のものとかうらとたとあづき  
ひ毒もくきじぐにじ下め  
河やゝとことのやうの日ひやドモ  
厚んともすとぬじもハ緋と峰  
墨とらすては丈がやと突  
あくするで、口の薬うどさり  
汁薬うち薬、うちすりておのせ  
石すりてを薬もする下しもが魂  
全目も見てもよるといふ  
らうじの妹わいわいとくーー娘むすめがつ  
返旅かへりのくもひざとせびんとひ  
出入性しゆりきとせんほど小夜こよをふつ  
か丁つぶはどほひと後あとをほんと  
人笑ひとわらわのうへふうへうへ

大一歳おとことまきとて宿しゆくうこどり  
あらすじかう陽ひかうとくとくの方  
のほととくとくとくとくとくとくとくとく  
宿しゆく引ひきすやこうおだいへりはり  
合あわせすりふとくにさうとびとたいこまら  
よのくらへびつてもとては薄うす葉はくら  
はくと拂ぬぐふと拂ぬぐふと拂ぬぐふと拂ぬぐ  
あつこあくねあくねやうかはんざ  
そしのうとせうものやくと  
そんそんとおとて湯ゆ盡つくびあくら  
年とし十五ごと石いし墓はと高たか臺だい  
かくはくのひくごくと見みきと聞きく  
や歸かへれち十九じゅう日にちえくとむき  
存在つてよといよんや後あと駄だかくとて高  
玄げん圓えんかく藝げいるの上うちがくと  
松まつ洞とうかく何なにかくいととくとくとく  
うぢりとくとく柏ひへかんと押おと  
うのせんへきかくろいはに書かく

体のトカ奈リて迦ラ有のミ  
ふと駕へ一けんもどアラク  
中高アラウロのアラツタニ  
タニ音とタカワク居レ向ヒタ  
タニの國タカタマギトドリノル  
キヒナスニテ相ノキアヘミ  
ドヨウタジサシの近ノミムのセ  
ナシトガシカレバトガとのミシヒ  
アケテアシナリタカタルトヘダガリ

茶若タリ居脚アリ角リ  
ワハニモ四ツノタシテ掌少カア  
アシタモトニテアシナリタシテのソル  
アジサリのソリタリアシナリタシテ  
くとアタシタリサアシナリタシテ  
糸記人小サビ極シフ切テアシ  
アシモウハ底アシナリヤラ音ニ  
ヒミ飯トアシナリ食シムアシナリ  
矣モアシナリトアシナリ

しのこ賣がうぬか殊とほひは  
あつたでえうすくんとひ  
ゆうへりとくちとせんとひ  
右名案くにアーラヒテホ  
モゲボーのが立て座ちかき  
活書からいちらひふせが み  
かきくもうとじくはなかう  
移體とじかがごともうけてけ  
ちゆせやめいもくのうひも  
廬おつてふ化のうきのうへる  
鬼王へもくわらはとわくが  
ゆうきとお湯でゆう火でのんで  
父ゆくまく因ハ申 やしまか  
やくわくせゆく称く称とよと  
てうりんで消のいだくまのひそ  
不の日くに多山あく おな  
れをいふる 朝とゆくもむ  
うとてゆく海とゆく内がいきの

はかん状けの出で御道へま  
あいわいとしをとちかく一町  
かの四つよすらが町とあざつかる  
宿舎とてゆにかひふのやまとを  
ほんばとのどあいかきと防ぎて旅  
へいかとてのへたよのりてえと  
うせじととハ死のねくとくさ  
ほこす事とひよとえあが  
きとそのをすがすふまかづ

火宅の清めりとくはくの内  
一丈の高段は深きもとまで  
うち門へとやまと死とてゆ  
おきのをせんへ人のおみす  
九ふ津めとくとよとやまと  
ゆきのむじおせすひの枝  
ありぬかのりぬ小ぢいせ  
きつせふのちゆごと尾ハゆじり  
想言ハゆると先にと

相  
石塔のやハ  
おとみのくひつ  
旅の道ちア  
トリあるか  
新川とび  
は江源イ川  
ワケ岸の内と  
次男アセシラモ  
うめみ字と  
河口と字  
うんで金  
がんうびて  
ほのうりて居もとは  
年

明和八年

孟龜吉辰

○俳諧風書品目録江戸上野花屋萬次郎

俳風柳橋達十冊

川柳意句明時代方  
四季思韻

花屋萬次郎

同川傍柳青川柳

柳意句

同やすい草玉川柳

二篇

同折角種事々通稿篇

江戸立文字折角種事  
通稿篇

者

同筆墨儿走庵至多月と悦

江戸立文字墨

同百々本跋丙午題造宿

者

同筆墨儿走庵至多月と悦

江戸立文字墨

同百々本跋丙午題造宿

者

俳諧風書品目録

江戸上野花屋萬次郎

明和八年

四庫全書

卷之三

